

教育研究業績書

2025年10月20日

所属：日本語日本文学科

資格：教授

氏名：山崎 淳

研究分野	研究内容のキーワード
日本中世文学, 説話文学, 仏教文学	説話集, 寺院文献資料, 真言密教
学位	最終学歴
博士（文学）	大阪大学大学院文学研究科終了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 高校での模擬授業	2019年6月19日	大阪府立春日丘高等学校において模擬授業を行った。
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 高等学校教諭（国語）専修免許	1994年3月25日	免許資格番号：平5高専第2148号
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 教務委員	2021年4月～現在	
2. 学生委員	2020年4月から2021年3月	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 寺院文献資料学の新展開 第8巻 近世仏教資料の諸相Ⅰ 新安流とその周縁	共	2025年3月	臨川書店	本巻の編集を担当。執筆者は上田霊宣、平川恵実子、三好賢子、瀬谷愛、中山一麿、木下佳美、山崎淳
2. 寺院文献資料学の新展開 第9巻 近世仏教資料の諸相Ⅱ	共	2020年8月	臨川書店	本巻の編集を担当。執筆者は渡辺麻里子、川端咲子、林久美子、須藤茂樹、向村九音、藤巻和宏、中山一麿、有瀬光崇、中前正志、本井牧子、木下智雄、山崎淳
3. 近世寺社伝資料『和州寺社記』・『伽藍開基記』	共	2017年2月	和泉書院	池上洵一・森田貴之・山崎淳・内田滯子・本井牧子・原田寛子・田中宗博他、「近世における寺誌・僧伝の形成と受容－『伽藍開基記』解題－」、(概要)寛文年間成立の『和州寺社記』(写本・上下二巻)と元禄五年(1692)刊『伽藍開基記』(全十巻)の全文翻刻(神戸説話研究会メンバーによる共同作業)。個人として担当したのは『伽藍開基記』の解題と同書翻刻の校閲。解題においては、書誌的事項のみならず性格や成立事情にも踏み込み、『伽藍開基記』が『元亨釈書』を引き継ぎつつ新たな展開を目指したものであり、僧伝としての性格を非常に強く持っていることを指摘した。pp. 445-486
4. 神と仏に祈る山 美作の古刹 木山寺社史料のひらく世界	共	2016年11月	法蔵館	中山一麿・森俊弘・苅米一志・山崎淳・伊藤聡・鈴木英之・落合博志・向村九音・和田剛・吉永隆記・木下佳美、「コラム 狐とお稲荷さん 序、①～④」(5本)、「『末寺住職願旦中御願控』」、(概要)岡山県の古刹・木山寺の蔵書調査を基にした研究報告。学術的に最新の成果を盛り込むとともに、一般読者の読み物として耐える内容をも志向したものである。担当したのは、コラム5本と資料紹介1本。前者では、木山信仰の大きな特徴である善覚稲荷及びキツネについて、様々な観点と資料からわかりやすく解説した。後者では、近世末期の末寺との関係を記した資料を紹介し、末寺の住職決定に至る過程を明らかにした。pp. 159、190-191、206-207、218-219、254-257(以上コラム)、288-295
5. 小野随心院所蔵の文	共	2008年3月	平成19年度科学研	随心院所蔵聖教の悉皆調査に基づく成果(論考・目録)をまとめた

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開			究費補助金 基盤研究 (B) 17320039研究報告書	もの。海野圭介・中川真弓・中山一磨との共同編集。責任編集は荒木浩
6. 金剛寺本『三宝感応要略録』の研究	共	2007年12月	勉誠出版	荒木浩・海野圭介・後藤昭雄・中川真弓・中原香苗・仁木夏実・箕浦尚美・山崎淳・米田真理子、「金剛寺本『三宝感応要略録』影印翻刻 校異」、「『三宝感応要略録』類話・出典注記関連記事一覧」、(概要)中国遼代に成立し、日本の仏教・文学に多大な影響を与えた『三宝感応要略録』の研究。現存最古の写本・金剛寺(大阪府河内長野市)蔵本を底本とした本文(影印・翻刻・校異・訓読文)と、論考3編とを収める。本文翻刻・校異とともに、類話・出典に関する論考1編を担当。本文は共同研究につき担当部分は抽出不可能。pp.143～150(担当論考)
7. 小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開	共	2007年3月	平成18年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 17320039研究報告書	随心院所蔵聖教の悉皆調査に基づく成果(論考・目録)をまとめたもの。海野圭介・中川真弓・中山一磨との共同編集。責任編集は荒木浩
8. 宝永版本 観音冥応集 本文と説話目録	共	2006年11月	和泉書院	池上洵一・内田滯子・大坪亮介・桐山佳子・柴田芳成・中川真弓・中原香苗・成恵華・橋本正俊・原田寛子・東啓子・三浦喜子・森田貴之・山崎淳・芳倉宏文、「解説」、(概要)近世中期、庶民教化に活躍した真言僧・蓮体(1663～1726)の編纂した『観音冥応集』の全文翻刻(底本は同志社女子大学蔵本)。本文の他に、解説、説話目録を付す。pp.212～241(巻4・28話～巻5・8話の翻刻)、pp.367～368(解説は中原香苗と共同執筆)
9. 春日権現験記絵 注解	共	2005年2月	和泉書院	浅見和彦・池上洵一・内田滯子・奥智鶴・木下資一・小林直樹・柴田芳成・新間水緒・田中宗博・谷垣伊太雄・近本謙介・生井真理子・中川真弓・中原香苗・橋本正俊・東啓子・福島尚・松本昭彦・三浦暁子・本井牧子・山崎敦子・山崎淳・横田隆志・桐山佳子・原田寛子、「注解」、「『春日権現験記絵』と明恵一卷十七・十八論一」、(概要)鎌倉時代末期に成立し、春日明神の霊験譚を集成した『春日権現験記絵』の全注釈(底本は春日大社蔵本)。巻第十四の一部(隆覚説話)と巻第十七全(明恵説話)の注釈、及び解説論文(全5編)の1つを担当。
10. 『是則集』注釈	共	1991年11月	詞林(大阪大学古代中世文学研究会)、10号	田島智子・阿部真弓・胡秀敏・渡會敦幸・中原香苗・近本謙介・中本大・赤松智子・長尾佐知子・山崎淳・堤和博・佐藤明浩・伊井春樹、(概要)大阪青山短期大学蔵『是則集』(藤原定家手沢本)の注釈。担当は40～45番歌。pp.63-72
2 学位論文				
1. 中世僧伝の形成と展開	単	2002年9月	大阪大学	博士(文学)。中世に陸續と製作された僧侶の個人伝についての研究。西行の伝記(『西行物語』)を中心とした第一編と、明恵の伝記(『明恵上人行状』『明恵上人伝記』)を中心とした第二編からなり、それぞれについて、その形成過程、人物造型の様相、後世での享受について分析した。
2. 『西行物語』の研究－虚像西行形成に関する試論－	単	1994年3月	大阪大学	修士(文学)。鎌倉時代に成立し、中世・近世の西行像に多大な影響を与えた『西行物語』についての研究。『西行物語』の枠組みの形成、並びに「廻国の歌僧」という人物像の造型について、『発心集』『宝物集』といった説話集、『新古今和歌集』『山家集』といった歌集との関係を軸に分析した。
3 学術論文				
1. 九華山地蔵寺蔵『費財録』翻刻・解題	単	2025年3月	臨川書店、寺院文献資料学の新展開 第8巻 近世仏教資料の諸相Ⅰ、pp.345-394	
2. 九華山地蔵寺蔵『授印可灌頂等記録』『河州錦部郡清水村九華山地蔵寺雜録』	単	2025年3月	臨川書店、寺院文献資料学の新展開 第8巻 近世仏教資料の諸相Ⅰ、	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
翻刻・解題 3. 山号「九華山」について	単	2025年3月	pp. 263-310 臨川書店、寺院文献資料学の新展開 第8巻 近世仏教資料の諸相Ⅰ、pp. 109-132	48の附論
4. 九華山地蔵寺経蔵の形成—研究史を兼ねて	単	2025年3月	臨川書店、寺院文献資料学の新展開 第8巻 近世仏教資料の諸相Ⅰ、pp. 69-108	
5. 九華山地蔵寺蔵『地蔵菩薩靈驗記』の位置	単	2023年6月	上方文藝研究(上方文藝研究会)、20号、pp. 54-60	
6. 真言宗寺院の黄檗派関係文献	単	2022年8月	黄檗文庫	
7. 安住院蔵『西行物語絵巻』の特色—附、翻刻	単	2022年7月	臨川書店、寺院文献資料学の新展開 第4巻 安住院資料の調査と研究、pp. 185-238	
8. 「男ノ心」は同じか—九華山地蔵寺所蔵文献から	単	2022年3月	勉誠出版、ことば・ほとけ・図像の交響 法会・儀礼とアーカイヴ(近本謙介編)、pp. 485-490	寺院所蔵の版本の意義を改めて考察した。版本は写本に比べ本文流動が少なく、また写本より残存量が多いために研究対象として魅力に乏しいようにも見える。しかし、所持者である僧侶の書入によりカスタマイズされることもままたり、実は唯一無二の存在となっている可能性のあることを指摘した。具体例として地蔵寺所蔵文献における版本の書入を取り上げ、それが当時の諺や浮世草子を考える上で興味深い存在であることも提示した。
9. 寺院所蔵文献における印記について—地蔵寺所蔵文献から	単	2020年8月	臨川書店、寺院文献資料学の新展開 第9巻 近世仏教資料の諸相Ⅱ、pp. 11-44	寺院所蔵文献における印記調査が蓄積により、各資料の性格や物的・人的ネットワークなどの解明がより進んでいくことを、地蔵寺所蔵文献を具体例として提示した。さらに、これら寺院所蔵文献の印記については、国文学研究資料館などのデータベースに連結できれば、より多くの成果につながる可能性のあることも指摘した。
10. 覚城院所蔵文献と地蔵寺所蔵文献—蓮体を起点として	単	2019年10月	臨川書店、寺院文献資料学の新展開 第1巻 覚城院資料の調査と研究Ⅰ、pp. 207-229	覚城院聖教の親本もしくはさらにその前段階に相当する本が地蔵寺聖教の中に見出されること、覚城院聖教の中に蓮体所持本が見出されることなどから、両寺院には当初予想していたよりも深い関係があることを報告し、二つの調査が、寺院所蔵文献を点の存在から線、あるいは面の存在へと発展させる可能性を指摘した。
11. 浄瑠璃『西国卅三番順礼記』第三段目について—順礼歌(御詠歌)享受の一例—	単	2018年3月	人間科学研究(日本大学生物資源科学部人文社会系研究紀要)、15号、pp. 94-112	西国三十三所の順礼歌(御詠歌)享受の様相について、浄瑠璃『西国卅三番順礼記』(寛文十年[1670]刊)を取り上げて考察した。その結果、当該作品の詞章に三十三所の順礼歌がほぼすべて利用されていること、順礼歌利用として、当時最大規模のものであることが判明した。また、三十三所の順礼歌を集成した他作品(中世末期成立の可能性のものもあり)との比較により、順礼歌詞章の多様性を確認することができた。
12. 相応寺創建説話における「河陽」と『元亨釈書』	単	2017年6月	語文(日本大学国文学会)、158号、pp. 39-53	沓演という平安時代の僧侶の伝記及び彼が建立した相応寺という寺の説話の変遷について、中世の文献を中心に考察した。その結果、同寺建立の地は山城に属する「河陽」だったが、鎌倉時代末期成立の『元亨釈書』では「河内」となっていること、「河陽」から「河内」への変化が『元亨釈書』編者の虎関師錬による改変の可能性があり、近世での沓演及び相応寺の伝承は『元亨釈書』が起点となっていることを指摘した。
13. 岩瀬文庫蔵『伽藍開基記』の形成過程について—巻第五を中心に—	単	2016年3月	人間科学研究(日本大学生物資源科学部人文社会系研究紀要)、13号、pp. 161-184	元禄五年(1692)刊『伽藍開基記』は、黄檗派の僧侶・道温懷玉によって編纂された、日本各地の仏教寺院創建者の伝記を集成した作品である。本作品には、愛知県西尾市の岩瀬文庫に編者自筆の草稿本が存在する。この写本の特に巻第五を精査することにより、稿本における編纂の具体的様相、刊行前での記事大量追加の事実、及び追加の具体的時期、追加記事の出典を明らかにした。
14. 『礪石集』巻第四末	単	2014年9月	和泉書院、論集	仏教説話集でも特に近世成立作品の研究が進んでいない点を鑑み、

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
7 話「尊勝陀羅尼功能ノ事」について－先行作品との関わりから－			中世・近世説話と説話集、pp.411-431	蓮体(1663～1726)編『礪石集』巻第四収録の「尊勝陀羅尼功能ノ事」を取り上げ分析した。その結果、本説話が天竺から日本に至る尊勝陀羅尼史を志向していること、『宋高僧伝』『元亨釈書』『沙石集』『真言伝』『尊勝陀羅尼經抄』といった中国・日本、前時代・同時代の資料を駆使していること、蓮体は各種資料から説話を再構成できる環境にいたことを指摘した。
15. 蓮体編『礪石集』と地蔵寺所蔵文献－地蔵関連資料を中心として－	単	2014年4月	仏教文学(仏教文学会)、39号、pp.99-112	地蔵寺(大阪府河内長野市)所蔵の地蔵菩薩関連文献と蓮体編の地蔵説話集『礪石集』『続礪石集』の関係を検討し、諸文献に見える蓮体自筆書き入れが、説話集の内容と直接につながることで、一見地蔵と無関係な説話も、実は蓮体による地蔵經典の講義を通過した上で収録されていることを明らかにした。このことにより、説話集編者と関係する寺院の蔵書が、作品成立の解明や作品の分析にいかん重要かを位置づけることができた。
16. 地蔵寺蔵『本朝孝子伝』の本文	単	2013年6月	上方文藝研究(上方文藝研究会)、10号、pp.17-31	藤井懶斎編『本朝孝子伝』には貞享二年版(漢文)、貞享三年版(漢文)、仮名本の三種の存在が確認されている。地蔵地蔵本は貞享三年版に分類されるが、精査の結果、貞享二年版と貞享三年版の中間的本文を持ち、貞享三年版の中でも早印であることが判明した。この事例は、寺院所蔵文献が伝本研究において意義のあるものであり、また、近世における儒学関係作品の仏教側における受容として注目すべきものであることを指摘した。
17. 寺院に所蔵される近世の文献－地蔵寺と蓮体の場合－	単	2012年4月	仏教文学(仏教文学会)、36-37号、pp73-82	仏教と文学との関わりを追求することが仏教文学研究のあり方ならば、仏教伝来以降の全時代が対象となるはずだが、現実として研究の中心となっている時代は、古代もしくは中世である。しかし、一方で寺院所蔵文献には近世のものが大量に存在する。そうした点に鑑み、それまで進めてきた地蔵寺所蔵文献調査において得られた情報の一端を紹介し、仏教文学研究において寺院所蔵の近世文献が持つ可能性をいくつか提示した。
18. 地蔵寺蔵『和漢合運』の書き入れから見た蓮体の志向－当該本の性格とともに－	単	2012年3月	人間科学研究(日本大学生物資源科学部人文社会系研究紀要)、9号、pp.288-302	地蔵寺蔵『指掌和漢皇統編年合運図(和漢合運)』という年代記の書き入れを分析し、蓮体の志向を抽出する試みを行った。その結果、そこには地元河内への愛着、過去の高僧や説話集編者への関心、漢詩文作者に対する関心といったものを読み取ることができた。これらは蓮体・地蔵寺という存在を有機的に過去に結びつけるものであり、また、蓮体の著作と地続きになっているものでもあることを指摘した。
19. 地蔵寺蔵『和漢合運』蓮体自筆部分－翻刻と解題－	単	2011年6月	上方文藝研究(上方文藝研究会)、8号、pp.83-107	地蔵寺蔵『指掌和漢皇統編年合運図(和漢合運)』は正保二年(1645)の版で、蓮体所持本である。同書の末尾五丁分に記された手書き年表部分(蓮体自筆分は約四丁半)を紹介し、当時の世間話を書き留めている点において説話伝承資料として、また蓮体の生年月日までが判明する点において伝記資料として意義深いものであることを指摘した。
20. 金剛寺蔵『集書』所収の赤穂事件関係資料「赤穂記飛書集」について－付翻刻	単	2011年3月	科学研究費基盤研究(B)課題番号19320037研究成果報告書(平成22年度)真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究－金剛寺本を中心に－、pp.157-165	金剛寺の所蔵文献の中から見出した「赤穂記飛書集」を紹介し考察を加えた。「赤穂記飛書集」(いくつかの抜き書きからなる『集書』という文献に収録)は、後に忠臣蔵の世界へと発展していく赤穂事件について記したものである。従来の資料から逸脱する内容ではないが、列挙された赤穂浪士の順番が他に類例を見ないなどの特徴を備えていること、寺院にはこうした資料も見出せる可能性があることを指摘した。
21. 地蔵寺蔵『三宝感應要略録』の書き入れについて－蓮体が見たもの－	単	2011年3月	笠間書院、日本古典文学研究の新展開、pp.415-438	古写本を用いた研究が主流となりつつある『三宝感應要略録』だが、版本の存在も無視すべきではない。特に書き入れのあるものは、『要略録』研究の先駆的業績とさえ言い得る。こうした認識から、慶安三年(1650)刊本である地蔵寺蔵本を取り上げ、その意義を考察した。その結果、地蔵寺蔵本の書き入れには、他の『要略録』伝本が参照された可能性の認められる箇所も存在すること、古写本文を相対化できるものもあることを指摘した。
22. 蓮体經典講義断章－そこで何が語られたのか－	単	2011年3月	語文(日本大学国文学会)、139号、pp.1-12	地蔵寺に蔵される經典講義(講経)についての蓮体自筆覚書には、「信長」という記述の見えるものが二点ある。この「信長」を中心に、講経の部分的復元を試みた。特に『梵網經古述記』講義で使わ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
23. 地蔵寺所蔵文献における蓮体自筆書き入れについて－『観世音持驗記』を中心に－	単	2010年3月	人間科学研究(日本大学生物資源科学部人文社会系研究紀要)、7号、pp. 265-278	れた信長説話については、経文との対応、説話選択・配列の傾向、蓮体の意識といった面から検討した。その結果、信長説話が、呪詛・調伏を主題としていること、蓮体の属す真言宗の流派や、蓮体の行っていた修法と関連付けられていることなどを指摘した。地蔵寺蔵『観世音持驗記』の上部欄外に見える蓮体の自筆書き入れについて考察したもの。件の書き入れは『観世音持驗記』全117話の内容をそれぞれ端的に要約したものであり、おそらく蓮体が經典講義に際しインデックスとして用いていたことを指摘した。また、このようなメモが記されたのは、『観世音持驗記』の目録が人名のみを列挙し、内容把握に便利とは言い難かったことが一因であると推測した。
24. 地蔵寺蔵「蓮体經典講義覚書」について	単	2009年7月	説話文学研究(説話文学会)、44号、pp. 71-81	地蔵寺所蔵文献の中には、一紙を二つ折りにした、いわゆる折紙形態の蓮体自筆覚書がある。この覚書の分析を通して、經典講義(講經)における説話利用の実際について考察した。覚書には、主に講經で語られた説話の題目とその説話の出典名が記されている。それらと付随する朱書からは、一日あたりに語られた説話の数や順番、講經の段取りやその変更、蓮体が用いた種本などを知ることができ、非常に貴重な資料であることが判明した。
25. 地蔵寺蔵『観音新驗録』－翻刻と解題	単	2009年6月	上方文藝研究(上方文藝研究会)、6号、pp. 21-43	近世仏教説話集研究の一環として、黄檗派の僧侶・月潭道微編『観音新驗録』(元禄九年[1696]刊)を紹介するとともに、伝本やその性格などを考察した。伝本調査の結果、三種に分類できることがわかった。また、『新驗録』は蓮体編『観音冥応集』の重要な種本の一つだが、古代・中世の説話も多く収録する『冥応集』と異なり、近世成立のものだけで構成されたきわめて当代性の強い性格の説話集であることも指摘した。
26. 『覚禅抄』所引の『三宝感應要略録』について	単	2009年3月	科学研究費基盤研究(B)課題番号19320037研究成果中間報告書(平成20年度)真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究－金剛寺本を中心に－、pp. 25-30	『三宝感應要略録』を用いた説話研究は、尊経閣蔵本や金剛寺蔵本といった古写本の紹介で、従来の活字本(底本は近世の版本)に基づく形を改める時期を迎えた。その点に鑑み、古い本文を探求する方法として、『要略録』の引用本文に着目した。その結果、鎌倉時代の写本が残る図像集『覚禅抄』にいくつかの引用を確認できた。さらに引用本文が、古写本を含め現存する『要略録』の本文を相対化し得るものであることを指摘した。
27. 『観音冥応集』の性格と研究の課題	単	2008年6月	語文(大阪大学国語国文学会)、90輯、pp. 1-10	蓮体編『観音冥応集』の全体的な性格を、成立・説話配列・表現・取材源の四点から考察したもの。また今後の課題として、1話ごとの分析と、そこから全体にフィードバックさせる必要性を提示した。
28. 蓮体所持本『沙石集』について－前稿の補足を兼ねて－	単	2008年4月	詞林(大阪大学古代中世文学研究会)、43号、pp. 89-98	前稿(21)を承け、蓮体開基にして入滅の地・地蔵寺(大阪府河内長野市)に残る蓮体蔵書と『観音冥応集』との関係を考察したもの。地蔵寺には蓮体が所持していた貞享二年(1685)刊『沙石集』が現存することを報告し、これこそが『観音冥応集』の直接の出典であると特定した。また、当該『沙石集』への蓮体自筆書き入れが、21で言及した改変や増補に利用されて『観音冥応集』本文へと発展していったことを指摘した。
29. 月潭道澄『笠置山記』－翻刻と研究－付『笠置山十題』翻刻	単	2008年3月	平成19年度科学研究費補助金 基盤研究(B)17320039研究報告書 小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相關的・総合的研究とその展開、pp. 208-219	黄檗派の禅僧・月潭道澄(1636～1713)作、『笠置山記』の翻刻(訓読文も付す)と研究。出典が『笠置寺縁起』と『元亨釈書』であること、津藩二代目藩主・藤堂高次に対する好意的な評価が認められることを指摘した。また、『笠置山記』の歴史をたどり、本作品が江戸時代の笠置寺を代表する寺伝であったと位置付けた。
30. 随心院聖教識語集成稿(二)	共	2008年3月	平成19年度科学研究費補助金 基盤研究(B)17320039研究報告	随心院所蔵聖教の11～22函までの目録稿。解題・調査経過報告・目録から成る。目録は、所蔵番号・整理名・外題・内題・装幀・識語の6項目。表紙の署名など、聖教の成立・伝来にかかわる情報も収載。解題(pp. 299-303)・調査経過報告(pp. 304)は山崎の単著。目録

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
31.『観音冥応集』出典考－巻第三8話を例として－	単	2007年4月	書 小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開、pp. 299-347 詞林(大阪大学古代中世文学研究会)、41号、pp. 66-77	(pp. 305-347)は共同研究につき担当部分抽出不可能。
32. 笠置寺蔵『解脱記』(解脱上人伝)－翻刻と解題－	単	2007年3月	平成18年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 17320039研究報告書 小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開、pp. 176-184	蓮体編『観音冥応集』巻第三8話の出典が『沙石集』(版本系統)収録の説話であることを明らかにし、『沙石集』を含む中世の類話に対し、『観音冥応集』では観音信仰強調のために本文が改変されていることを指摘した。また、『太平記』の道行文的詞章が、当該説話の男女の恋の場面に大量に挿入されていること、それが『太平記』の場面を踏まえた上での増補であることも指摘した。
33. 随心院蔵の春日関係資料断簡について－『春日御流記』もしくは『漸入仏道集』の説話目録－	単	2007年3月	平成18年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 17320039研究報告書 小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開、pp. 70-75	京都・笠置寺蔵『解脱記』(中世初頭に活躍した解脱房貞慶の伝記)の貞慶伝記文献・貞慶伝承の中での位置について考察したもの。本作は『国文東方仏教叢書』に翻刻(昭和三年)されているが、若干の誤りがあり、まずそれを改めた。解題では、本作が『元亨釈書』に基づきながらも随所に和歌の表現を取り入れていること、伝承歌といふべき作者未詳歌を明恵との関係の中で貞慶に詠ませている点で特異な伝記であることを指摘した。
34. 随心院蔵『光明真言表白』－翻刻と解題－	単	2006年3月	平成17年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 17320039研究報告書 小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開、pp. 54-61	随心院聖教類の中から見出した二枚の断簡資料(近世中期写と推定)が、『春日権現験記絵』(延慶二年[1309]成立)の前段階に位置する、『春日御流記』『漸入仏道集』といわれる説話集の説話目録であることを明らかにした。
35. 随心院蔵『法性寺殿写』－解題と翻刻－	単	2005年3月	平成16年度大阪大学大学院文学研究科共同研究 研究成果報告書 小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求、pp. 251-283	随心院において二分割の状態蔵されていた『光明真言表白』(明徳二年[1391]写)を復元したもの。解題では、本資料の内容が鎌倉時代における鑑真伝の特徴を備えていることを指摘するとともに、南北朝末期における唐招提寺開山忌(舍利会)の実態を示す資料としての位置付けを行った。
36.『金玉要集』と類話	単	2004年3月	和泉書院、日本古典文学史の課題と方法 漢詩 和歌 物語から説話 唱導へ、pp. 455-480	京都・随心院蔵『法性寺殿写』の翻刻と解題。解題では、本資料が『東大寺縁起絵詞』の鑑真関係説話の抄出であることを明らかにし、本文系統の特定を試みた(結果としては、2系統ある本文のどちらとも言えない)。また本資料が、『東大寺縁起絵詞』の最古の伝本(永享三年[1431]書写本)の本文を相対化する存在であると位置付けた(なお、翻刻では永享三年写本との校異を挙げた)。
37.『金玉要集』覚書－	単	2002年10月	詞林(大阪大学古代	他作品に見える類話との比較を通し、『金玉要集』の本文の性格を考察した。その結果、『金玉要集』は、『沙石集』では「梵舜本」、『発心集』では「異本」(神宮文庫蔵本)に近い本文を有していることをまず指摘した。ただし、ほぼ引き写して既存の作品(特に『沙石集』)を利用している部分もある一方、直接利用とは言えない部分もあり、複数作品の綯い交ぜや未知の資料利用の可能性など、一筋縄ではいかない作品であることも判明した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
その本文を中心に－			中世文学研究会)、32号、pp.34-46	の説話集や唱導資料、原拠とおぼしい仏教経典を視野に入れつつ考察した。『金玉要集』には一定の編纂意識が見出せること、ただし現行本文がきわめて混乱を来しているものであること、内容面においては『神道集』等の安居院唱導資料との関係が深いことを指摘した。
38. 内閣文庫蔵『金玉要集』	共	2002年7月	和泉書院、磯馴帖・村雨篇、pp.137-235	文学作品・芸能作品との関わりが指摘され、重要な唱導資料とされながらも、部分的な紹介のみに止まっていた『金玉要集』(底本は内閣文庫蔵本)の全文翻刻。共同執筆者は、廣田哲通・近本謙介・伊藤正義・山崎敦子(共同作業につき本人担当部分抽出不可能)。
39. 明恵の伝記文献・説話研究の現在	単	2002年3月	大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究 研究成果報告書 〈心〉と〈外部〉－表現・伝承・信仰と明恵『夢記』一、pp.339-353	近代以降における、明恵の伝記文献・説話に関する先行研究を概観し、2002年当時での到達点と問題点を提示したもの。今後の研究進展への一つの材料として、明恵の伝記文献と禅宗文献との関わりを示す具体的な例を、『明恵上人伝記』の中から紹介した。
40. 『金文玉軸集』とその端に記された和歌－『明恵上人行状』の一記事から－	単	2001年1月	古代中世文学研究論集(大阪大学古代中世文学研究会)、3集、pp.349-378	その存在は知られていながら、現在は伝わっていない『金文玉軸集』という明恵の著作についての考察。『明恵上人行状』の記事と和歌の検討を通して、『金文玉軸集』は『大唐西域記』などの中国の旅行記を基にして作成された作品であったことを指摘し、その読者として想定されていたのは在家の人達であった可能性を提示した。
41. 『明恵上人行状』における引用説話について－明恵伝形成に関する一試論－	単	1999年5月	中世文学(中世文学会)、44号、pp.56-64	『明恵上人行状』の形成過程における明恵自身の役割について、作品に引用される高僧の説話の分析を通して考察したもの。明恵の根本伝記、『明恵上人行状(仮名行状)』に引用される『華嚴経伝記』等を原拠とする説話は、もともと明恵が語っていたものであり、明恵はそれらの説話に登場人物の所行に自己を重ね合わせていたこと、そして『明恵上人行状』の大きな素地は、おそらく明恵生前に明恵自身の中に形作られていたことを指摘した。
42. 『明恵上人行状』中巻部の依拠資料について－「漢文行状」春日明神託宣記事を対象に－	単	1999年3月	古代中世文学研究論集(大阪大学古代中世文学研究会)、2集、pp.212-255	春日明神が託宣によって明恵の渡天竺を引き留めたという『明恵上人行状(漢文行状)』の一挿話の出典、及び『明恵上人行状』の古態本文について考察したもの。当該挿話には、ともに明恵の著作である『十無尽院舍利講式』と『秘密勸進帳』とが綯い交ぜに利用されていること、また、当該挿話が元来は現行の形よりも簡略であった可能性のあることを指摘した。
43. 『高山寺明恵上人行状(仮名行状)』と『高山寺縁起』	単	1998年12月	待兼山論叢 文学篇(大阪大学文学会)、32号、pp.1-13	明恵没(1232)後まもなく編まれた『仮名行状』(高弟の喜海編)と建長五年(1253)成立の『高山寺縁起』(同じく高弟の高信編)との比較を通し、『高山寺縁起』は『仮名行状』に依拠して作られている可能性があること、『高山寺縁起』が部分的ながら『仮名行状』の古態本文を想定するのに有効な資料であることを指摘した。
44. 『鳥歌合』覚書	単	1998年4月	詞林(大阪大学古代中世文学研究会)、23号、pp.35-45	大阪青山短期大学蔵『鳥歌合』について、特に跋文を中心に考察したもの。当該『鳥歌合』は、これまでに確認されている『鳥歌合』とは異なるもの(共通点もある)であること、成立は近世に入ってから(上限は慶長八年[1603]、下限は宝永五年[1708])であること、跋文における主人公の師匠が、烏丸光広を投影した人物であること、古浄瑠璃『しのだづま』と『聴き耳』の趣向が類似していることを指摘した。
45. 延慶本『平家物語』の滝口入道像－西行像享受の一例として	単	1997年9月	世界思想社、日本文学史論、pp.163-176	『平家物語』の人物造型について、西行との関わりから考察したもの。『平家物語』諸本中、滝口入道出家の場面において、延慶本が独自要素を多く持っていることに注目し、その特異さが『西行物語』の西行出家場面に基づいている可能性のあること、『西行物語』利用には、滝口入道を西行と同様の「心づよき」人物として造型する意図があった可能性があることを、他の記録・説話を視野に入れつつ指摘した。
46. 『西行物語』の方法－和歌配列を中心として－	単	1996年10月	国語国文(京都大学文学部国語学国文学研究室)、65巻	『西行物語』に収録された和歌の配列を具体的に検討し、物語の形成過程・人物造型について考察したもの。『西行物語』の旅の場面は、『新古今和歌集』の旅の和歌が核となって成立しており、『山

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
47.『楞伽山伝』考－『明恵上人伝記』の一資料として－	単	1996年10月	古代中世文学研究論集(大阪大学古代中世文学研究会)、1集、pp.242-267	家集』歌は、それらの『新古今和歌集』歌を補足、発展させる形で取り込まれているという物語形成の過程があること、従って『新古今和歌集』が、廻国の歌僧としての西行を造型するための根本的な資料であったことを指摘した。 鎌倉時代初期の名僧・明恵(1173～1232)の伝記として最も流布した『明恵上人伝記』の和歌集成部分を考察したもの。当該部分には明恵の自撰歌集である逸書『楞伽山伝』の直接利用された可能性があり、伝説的側面の強いとされる『明恵上人伝記』の中にも、明恵の和歌・伝記資料として評価のできる部分の存在することを指摘した。
48.『西行物語』の『宝物集』利用について	単	1995年1月	語文(大阪大学国語国文学会)、62・63輯、pp.75-86	『西行物語』における『宝物集』摂取の具体相を明らかにし、先行作品の利用と人物造型との関わりを考察したもの。『宝物集』の説話・文言は西行自身が語る形で記されていること、『西行物語』の西行は、『宝物集』の内容を具現化する如き人物造型となっており、『宝物集』利用が表現レベルに留まらない、宗教者西行を確立するための積極的なものであったことを指摘した。
49.〔資料紹介〕慶応義塾大学附属図書館蔵『西行繪詞』	単	1994年10月	詞林(大阪大学古代中世文学研究会)、16号、pp.1-44	『西行物語』諸本において重要視されながらも、全貌が未紹介であった寛永本の一本、慶応義塾大学附属図書館蔵『西行繪詞』の翻刻。解題では、『西行繪詞』の独自本文から、同系統の永正本より成立は早いものの、両者は相補う関係にあること、独自和歌から、『山家心中集』『御裳濯和歌集』の存在が注意されること、本文改変から、広本系の記事移し替えによって、より整った西行伝を作り出そうとした意図のあることを指摘した。
50.『松浦宮物語』における神奈備皇女の位置付け	単	1994年4月	詞林(大阪大学古代中世文学研究会)、15号、pp.88-94	鎌倉時代初期成立の『松浦宮物語』における女主人公の位置付けについて考察したもの。男主人公、弁少将の入唐する際に交わされた二組の贈答歌の解釈を通し、少将の初恋の女性である神奈備皇女が、従来いわれている以上に、物語前半において重い位置を占めていることを指摘した。
51.『西行物語』に描かれた西行像－文明本を中心として－	単	1992年4月	詞林(大阪大学古代中世文学研究会)、11号、pp.31-45	中世・近世の西行像形成に大きな影響を与えた『西行物語』を、広本系の代表的伝本・文明本(文明十二年[1480]奥書・宮内庁書陵部蔵)を中心に考察した。その結果、『西行物語』の西行には、特に宗教者として描かれる場合、「心強き」性格が付与されており、他の登場人物もその性格を強調するために造型されていること、また、その傾向は文明本に顕著であることを指摘した。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 寺院所蔵資料から見る近世一九華山地蔵寺蔵『費財録』を軸に	単	2024年10月26日	佛教史学会	第七十四回佛教史学会学術大会(於大谷大学慶聞館)のシンポジウム「寺院文献学という領域－ジャンル・対象・方法－」における発表
2. 九華山 地蔵寺	単	2017年9月	日本宗教文献調査学	第1回合同研究集会(於慶應義塾大学)でのポスター発表。
3.『伽藍開基記』の可能性－懷玉道温の目指したもの－	単	2016年6月	仏教文学会	平成28年度6月例会(於神戸女子大学教育センター)での口頭発表。内容は(著書)8の解題に基づく。また、(報告発表等)の3は本発表の概要報告。
4. 蓮体の活動と地蔵寺所蔵文献－地蔵菩薩関連資料を中心として－	単	2013年9月	仏教文学会	平成25年度大会(於専修大学)での口頭発表。内容は(学術論文)37参照。
5. 寺院に所蔵される近世の文献－地蔵寺と蓮体の場合－	単	2011年5月	仏教文学会	平成23年度仏教文学会大会(於東洋大学)シンポジウム「仏教文学研究の可能性」での口頭発表。内容は(学術論文)35参照。
6. 蓮体經典講義断章－そこで何が語られたのか－	単	2010年7月	日本大学国文学会	平成22年度日本大学国文学会(於日本大学文理学部)での口頭発表。内容は(学術論文)30参照。
7. 地蔵寺蔵「蓮体講経覚書(仮題)」につ	単	2008年6月	説話文学会	平成20年度説話文学会大会(於熊本大学)での口頭発表。内容は(学術論文)28参照。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
いて				
8.『観音冥応集』の世界	単	2006年12月	仏教文学会	平成18年度仏教文学会本部9月例会(於大阪府立大学)での口頭発表。内容は(学術論文)25参照。
9.『最後臨終行儀事』について－『高山寺明恵上人行状』との関わりを中心に－	単	2002年9月	仏教文学会	平成14年度仏教文学会本部9月例会(於龍谷大学)での口頭発表。『明恵上人行状(仮名行状)』と『最後臨終行儀事』という、明恵没後に現れた二つの伝記資料の関係について考察した。両者は直接関係にはないが、共通源泉を持っていること、源泉の成立は明恵没後のかなり早い時期であること、両者の比較を通じ、『明恵上人行状』という伝記が、明恵の言葉を書き留めようとする傾向にあることを指摘した。
10.『明恵上人行状』における引用説話について－明恵伝形成に関する一試論－	単	1998年5月	中世文学会	平成10年度中世文学会春季大会(於立正大学)での口頭発表。内容は(学術論文)11参照。
11.『西行物語』の和歌について	単	1995年1月	中世文学会	平成7年度中世文学会春季大会(於駒沢大学)での口頭発表。内容は(学術論文)5参照。
3. 総説				
1.総論	単	2025年3月	臨川書店	『寺院文献資料学の新展開 第8巻 近世仏教資料の諸相Ⅰ』の編集者として執筆を担当。
2.総論	単	2020年8月	臨川書店	『寺院文献資料学の新展開 第9巻 近世仏教資料の諸相Ⅱ』の編集者として執筆を担当。
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.安住院蔵『西行物語絵巻』について－その本文と絵と独自異文をめぐって－	単	2021年11月6日	第6回寺院資料調査研究報告(大阪大学古代中世文学研究会・寺院資料調査研究報告 合同特別例会 於大阪大学豊中キャンパス)。	調査メンバーとして参加している安住院(岡山県)所蔵『西行物語絵巻』についての報告発表。本報告会のテーマは「知られざる古筆・断簡と寺院経蔵－瓶井山禅光寺安住院－」。
2.覚城院聖教調査と新安祥寺流－四国での伝播解明に向けて－	単	2020年4月	仏教文学(仏教文学会)、45号、pp.63-65	コメンテーターとして参加した6のシンポジウムにおけるコメントを要約したもの。
3.司会		2020年2月2日	第4回 寺院資料調査 研究報告(於大阪大学中之島センター)。	テーマ「修学・開帳・蔵書－近世を耕す」。本報告会での各発表は、著書9に収録。
4.コメンテーター		2019年4月27日	2019年度 仏教文学会4月例会《シンポジウム》蔵書解析としての聖教調査－覚城院と新安流を例として－	8参照。
5.地藏寺聖教と覚城院聖教－蓮体研究との関わりから－	単	2018年3月17日	第1回寺院資料調査研究報告(於大阪大学中之島センター)	調査メンバーとして参加している覚城院(香川県)の文献資料についての報告。内容の一部は(学術論文)42参照。
6.(コラム)「西国三十三所順礼道中図」の多様性－大坂屋長三郎版を中心に－	単	2017年11月	二〇一七年度 特別展 紀州地域と西国順礼(和歌山大学 地域活性化総合センター 紀州経済史文化史研究所)、pp.18-19	近世中期以降に多数刊行された西国三十三所巡礼案内図は、書肆が異なっても大枠では共通のフォーマットを持つ。しかし、一方で地名の有無や方角を示す文字の向きなど、細かい点で相当の相違が認められること、それは同じ書肆の巡礼図間にも存在することを確認した。そして、このような多様性は、巡礼図における宗教的要素・観光的要素と深く関わっていることを指摘した。
7.『伽藍開基記』の可能性	単	2017年4月	仏教文学(仏教文学会)、42号、pp.75	(学会発表)8参照。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
8.《書評》平野多恵著『明恵 和歌と仏教の相克』	単	2012年7月	-76 説話文学研究(説話文学会)、47号、pp.254-256	平野多恵『明恵 和歌と仏教の相克』(2011 笠間書院)に対する書評。後に『リポート笠間』No.53に転載(2012年11月、pp.190-192)。
9.平成十四年度博士論文(課程)要旨:中世僧伝の形成と展開	単	2004年3月	大阪大学大学院文学研究科紀要、44号、pp.108-109	博士(文学)学位論文の要旨。(学位論文)2参照。
6. 研究費の取得状況				
1.近世仏教説話集の知的基盤についての研究ー真言寺院所蔵の聖教及び出版物との関わりからー	単	2018年から2023年	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(課題番号18K00293)	これまで調査を進めてきた大阪府河内長野市の地蔵寺において新たに見出された聖教を主たる調査対象とし、近世の仏教説話集がどのような知的基盤の上に形成されたのかという問題を解明することを目的とする。具体的には、説話集編者として著名な真言僧・蓮体(1663~1726)を軸に、彼と関わりがあった寺院の所蔵文献や、寺外のものも含む関連資料を調査し、彼がどのような学問的環境や知識体系の中にいたのかを明らかにする。
2.近世仏教説話集の形成・出版・享受についての研究ー地蔵寺所蔵文献との関わりから	単	2014年から2017年	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(課題番号26370248)	大阪府河内長野市の地蔵寺を中心にいくつかの寺院と文庫の所蔵文献を調査し、近世の仏教説話集について分析を進めた。その結果、中世のみならず近世においても仏教説話集の形成や享受の場として寺院が重要であること、所蔵文献1点1点の精査が出版に至る経緯を考える上で有効であることを従来よりも明確に示すことができた。さらに、地蔵寺では今後の研究につながる新たな資料群を見出すことができた。
3.真言密教寺院の所蔵文献と近世前中期の説話文学に関する研究ー地蔵寺を中心として	単	2011年から2013年	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(課題番号23520246)	大阪府河内長野市の地蔵寺が所蔵する文献の調査を行い、得られたデータをもとに、地蔵寺開山・蓮体の著作を分析した。その結果、近世における仏教説話集の形成や説話集編纂者の知識体系・志向・行跡を考察する上で、寺院所蔵文献の調査がきわめて有効であることを指摘した。また、寺院に所蔵される近世の版本が、諸本研究や出版研究のために注目すべき資料であることを提示することができた。
4.近世仏教説話集と寺院所蔵文献に関する研究ー蓮体の著作と河内地蔵寺を中心として	単	2008年から2010年	平成20年度科学研究費補助金 基礎研究(C)(課題番号20520163)	大阪府河内長野市の地蔵寺が所蔵する文献の調査を行い、そこで得られた書誌データ、及び諸文献の内容を検討した。そして、開山・蓮体の説話利用の様相と、彼の仏教経典講義の実態を明らかにした。その結果、近世における仏教説話集の形成に、寺院に所蔵されている文献が極めて深く関わっていることを、一つのモデルとして示すことができた。さらに、蓮体の伝記を、従来提示されていたものよりも拡充させることができた。
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
1.2022年4月～現在	仏教文学会委員			
2.2020年4月から2022年3月	仏教文学会委員			
3.2018年4月から2020年3月	仏教文学会委員			
4.2016年4月から2018年3月	仏教文学会例会委員長			
5.2012年4月から2020年3月	仏教文学会例会委員			
6.2010年4月から2012年3月	仏教文学会委員			
7.1997年12月～現在	仏教文学会			
8.1992年6月～現在	説話文学会			
9.1991年5月～現在	中世文学会			